

ここからは評価開発グループの参考資料を載せる

資料Ⅰ 文献によるテキストマニング(Ⅰ部抜粋)

行動特性	書名
在職中の知識や人脈を生かして活躍する	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
人を元気にして勢いをつけるタイプ	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
楽天主義	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
想定外のことが起きても、その変化を楽しむタフな精神	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
見えないところに気持ちを込めることが好き	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
信頼できる人は器が大きく、大きな視野を持って、自分で判断し、自分の言葉で語り、許容力がある	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
温厚、誠実で行動力があり、地域の人の中に溶け込んで説得しながら成果を出す	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
新鮮な目で見て確かめる	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
リスクはあるけれど、やるだけのことはあろう	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
人をやる気にさせる不思議な力	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
不屈な闘志	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
自らの報酬のカット	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
地域で頑張っている人たちがとてもよくしゃべってくれた	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
自らの意思を明快にしゃべる	坪田知己『ふるさと創生 架け橋を創る人たち』講談社 2011年
(原料や製法に)徹底的にこだわる	香坂玲『地域再生 逆境から生まれる新たな試み』岩波ブックレット No.851 2012年
苦労だと思ったことはない	香坂玲『地域再生 逆境から生まれる新たな試み』岩波ブックレット No.851 2012年
前向きな言葉を並べて駆り立てられるように話すエネルギー	香坂玲『地域再生 逆境から生まれる新たな試み』岩波ブックレット No.851 2012年
自分が生きている間に何とか実現せねばという危機感	香坂玲『地域再生 逆境から生まれる新たな試み』岩波ブックレット No.851 2012年
自分の活動に厳しい目を向ける	香坂玲『地域再生 逆境から生まれる新たな試み』岩波ブックレット No.851 2012年
外から、地域の人が気がつかないちょっとしたヒントを出す	根本祐二『「豊かな地域」はどこが違うのか 地域間競争の時代』ちくま新書 (2013)
過半数程度の合意でも政治家として進めるべきところはすすめる	根本祐二『「豊かな地域」はどこが違うのか 地域間競争の時代』ちくま新書 (2013)
生じた問題は進める中で修正していく	根本祐二『「豊かな地域」はどこが違うのか 地域間競争の時代』ちくま新書 (2013)
若いころから油まみれ、汗まみれになって働いてきた苦勞人	相川俊英『奇跡の村 地方は「人」で再生する』集英社新書 (2015)
数字に敏感	相川俊英『奇跡の村 地方は「人」で再生する』集英社新書 (2015)
コストと利益を常に意識し、いつしか「儲からなかったら、どんな能書きを行ってもダメ」	相川俊英『奇跡の村 地方は「人」で再生する』集英社新書 (2015)
若いころから汗まみれ油まみれになって働き、しかも自分の力で新事業を切り開いてきた	相川俊英『奇跡の村 地方は「人」で再生する』集英社新書 (2015)
...	
ヒト・モノ・カネ・情報などについての最新の考え方を学び実践に生かす	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
先輩経営者の知恵と実践に学び、経営のあり方・英英に対する着眼点を捉える	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
様々な業種・業態のメンバー相互でネットワークの輪を広げる	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
内外の環境変化を冷静に分析し、明確なビジョンと戦略の立案、実践推進する能力	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
経営環境への対応	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
資金繰りと財務	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
判断力と決断力	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
学習と訓練	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
前任者との関係	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
古参社員と部下の育成	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
使命に気付く	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
適性の判定	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
子孫に美田を残さずの精神	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
人生の目的は何か	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
地域産業振興は、志をもった職員が命懸けでやらなければ成功しない	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
タダの広告媒体は極力有効活用すること	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
自分を捨て去ること、動じないこと	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
家族には一番の応援者になってもらうこと	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
培った人脈を生かす	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
故郷の強みを発揮する生き方	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
行動・こだわりにも悪くも「その人らしい」といわれることをすべき	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
現状維持は退歩以外何もものでもない	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
インパクトを与え、自分を変え、周囲を巻き込んで変化をもたらす	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
待つより進めの開拓精神	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
問題解決するより見つける姿勢が大切	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
気づかなかったことを知り、それを素直に認識し、どう対処するかを考える力と行動力を身につける	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
渉外力の充実	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
地域にモノづくりができる人	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)
当たり前のことを当たり前にできる人	関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社 (2007)

計 343 項目

資料2 作成したアンケート

地域貢献人材の分析に関するアンケート調査（依頼）

残暑の候、皆様におかれましてはますます御活躍のこととお慶び申し上げます。現在、本校は文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に研究指定され、「地域に貢献している人材がいかなる資質を持っているのか」というテーマを掲げて研究をしております。

地域社会の問題の顕在化、人口減少社会、社会から若者に対して求められる資質能力の変化など、学校と地域を取り巻く環境は、目まぐるしく変化しております。様々な要請に対応した、効果的で有意義な学校教育改善の在り方が喫緊の課題であると認識し、関心を持っております。

今回、地域で活躍されている皆様が日々どのように社会課題に取り組んでいるのかという現状を伺いたいと考え、アンケート調査を実施することといたしました。

このアンケートは、地域で活躍されていらっしゃるあなたの現状をどのように認識しておられるかをお聞きするものです。御承知の範囲内で推測してお答えいただければ幸いです。

御多忙のところ、誠に恐縮ですが、率直な御意見をいただきたくお願い申し上げます。なお、集計分析の上で、個人名はもちろん、職場名を出すことはございません。このアンケートで得た情報は、研究目的のみに使用するものであり、部外へ漏出せぬよう厳重に管理いたします。

誠に恐れ入りますが、9月30日（月）までに同封の封筒に入れて投函していただくようお願いいたします。

また、オンラインでも回答いただくことが可能です。

右のQRコードを読み取っていただき、御回答ください。

なお、オンラインで御回答いただいた場合は、本紙での回答・返送は不要です。その場合、本用紙および同封の返信封筒は、お手数ながら破棄をお願いいたします。



【注意事項】

- ・記述式の質問項目以外については、該当するものを○で囲んでください。
- ・任意調査ですので、事情により回答が難しい質問に関しては無理に回答していただく必要はございません。
- ・何か御不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

連絡先

〒413-0102

静岡県熱海市下多賀1484の22 静岡県立熱海高等学校 内

「文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」校内地域連携推進委員会

評価開発グループ 担当 奥山・坂田・野田

電話番号 0557-68-3291

FAX 0557-68-1854

1 あなたのご職業とお役職を教えてください。

ご職業

お役職

2 あなたの年齢として該当するものの番号を○で囲んでください。

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|------------|
| 1 10歳未満 | 2 10歳～20歳未満 | 3 20歳～30歳未満 | 4 30～40歳未満 |
| 5 40～50歳未満 | 6 50歳～60歳未満 | 7 60歳～70歳未満 | 8 70歳以上 |

3 あなたが地域のことを意識し、地域に貢献する活動を始めたのは何歳くらいの頃からですか。該当するものの番号を○で囲んでください。

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|------------|
| 1 10歳未満 | 2 10歳～20歳未満 | 3 20歳～30歳未満 | 4 30～40歳未満 |
| 5 40～50歳未満 | 6 50歳～60歳未満 | 7 60歳～70歳未満 | 8 70歳以上 |

4 あなたが地域に貢献するような活動に取り組み始めたきっかけを教えてください。(自由記述)

<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>

5 あなたが地域の課題として強く認識されていることは何ですか。該当するものすべてについて、番号を○で囲んでください。その他に該当するものがある場合は枠内にお答えを御記入ください。

- | | | | | |
|--------------|--|-------------|-----------|--|
| 1 エネルギー問題 | 2 林業振興 | 3 環境問題 | 4 地域活性化 | |
| 5 観光によるまちづくり | 6 自然の観光利用 | 7 鳥獣害問題 | 8 新商品開発 | |
| 9 子どもの学力向上 | 10 子育て支援 | 11 少子化問題 | 12 高齢化問題 | |
| 13 水産業振興 | 14 津波対策 | 15 土砂崩れ対策 | 16 地震対策 | |
| 17 地域医療 | 18 農業振興 | 19 産業の後継者問題 | 20 空き家問題 | |
| 21 貧困問題 | 22 幼児虐待 | 23 治安問題 | 24 バリアフリー | |
| 25 教育環境問題 | | | | |
| 26 その他 | <table border="1"><tr><td></td></tr></table> | | | |
| | | | | |

※「鹿児島大学 COC 事業」資料を参考に作成

6 以下の設問は、あなたの様子に関する認識をお尋ねするものです。

現在の各項目に関するあなたの様子として、最も近いと思われるもの、

高校生の頃（10代の頃）の自分を振り返って、最も近かったと思われるものを○で囲んでください。

（尺度：1 = 全くそう思わない、2 = そう思わない、3 = そう思う、4 = かなりそう思う）

項目		尺度							
上段：現在のあなたについて		1	—	2	—	3	—	4	
下段：高校生の頃（10代の頃）の自分を振り返って		全くそう思わない				かなりそう思う			
1	自分は行動力があると思う。（あったと思う。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
2	自分なりの目標をもった上で、計画を立てながら実行することができる。（実行することができた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
3	ほかの人を巻き込んで行動することができる。（行動することができた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
4	海や山などの自然に囲まれた生活を愛している。（愛していた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
5	地元これから住みたいと思う。（住みたいと思っていた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
6	地域住民と触れ合う機会を積極的に作っている。（作っていた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
7	自分の住む地域の情報に対して、敏感である。（敏感であった。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
8	地元の悪いところよりも、良いところのほうが目に付く。（目に付いていた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
9	地元で、将来のことや実現したいことを話し合える人がいる。（人がいた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
10	本音を気兼ねなく発言できる。（発言できていた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
11	地域の現状に満足せずに、より良いものを自分たちの手で作り出そうという意識がある。（意識があった。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
12	周囲から反対されても、粘り強く取り組みを続けることができる。（できていた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
13	地元の課題を解決するヒントは、地元の人たちの中にあると考える。（考えていた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
14	知りたいことがあったとき、関係者に直に会って話を聞く。（聞いていた。）	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4

15	文献やインターネットで調べたことだけでは情報不足であることを理解している。(理解していた。)	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
16	面識のない人にも気軽に話しかけることができる。(話しかけることができていた。)	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
17	旧来の人間関係を大切にすることに加え、新しい人間関係を作ることを楽しむことができる。(できていた。)	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
18	自分と異なる立場や役割を持つ人と交流している。(交流していた。)	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
19	<u>身の回りの人の課題</u> について、目標や当事者意識をもって挑戦することができる。(挑戦できていた。)	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
20	<u>地域の課題</u> について、目標や当事者意識をもって挑戦することができる。(挑戦できていた。)	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4
21	地域の魅力が増すと、自分の中での地域に対する愛情が深く大きくなる。(愛情が深まることがあった。)	現 在	1	—	2	—	3	—	4
		高校時代	1	—	2	—	3	—	4

7 現在あなたが地域に貢献する活動に取り組んでいらっしゃる動機や理由を教えてください。(自由記述)

8 その他 何か御意見・御感想がございましたら、御自由にお書きください。

質問は以上です。

御協力ありがとうございました

資料3 ルーブリック

評価開発グループ ルーブリック (評価規準)

	探究力	自発性	協調性
A	<p>「現状・目標・問題を把握し、問題解決のための課題を見出し、問題を解決する方法や見通しを適切に立てることにより課題を遂行することができる」 (「課題遂行のために行動する」「現場主義」)</p> <p>【具体例】(Bの例に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知りたいことがあったとき、関係者に直に会って話を聞く。 ・文献やインターネットで調べたことだけでは情報不足であることを理解している。 ・自分なりの目標をもった上で、計画を立てながら実行することができる。 	<p>「身の回りにある問題を自分事として捉え、様々な情報を適切に収集し、積極的に自分の意見を発表・提案することができる。」 (「自分事として地域の人と協働する」)</p> <p>【具体例】(Bの例に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題解決につながる課題を達成するため意見を積極的に出すことができる。 ・自分は行動力があると思う。 ・現状に満足せずに、より良いものを自分たちの手で作り出そうという意識がある。 ・周囲から反対されても、粘り強く取り組みを続けることができる。 	<p>「面識のない人・自分と異なる立場役割を持つ人とも関わり、新しい人間関係づくりも楽しむことができる。」 「周囲の人と関わり、円滑な人間関係を構築することができる。」 (「新しい人間関係を楽しむ」)</p> <p>【具体例】(Bの例に加え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・状況に応じて協力体制をつくることができる。 ・他の人を巻き込んで行動することができる。 ・面識のない人とも会話をすることができる。 ・自分と異なる立場や役割の人とも交流できる。 ・具体的に説明し協力を依頼することができる。
B	<p>「現状・目標・問題を把握し、問題解決のための課題を見出すことができる」</p> <p>【具体例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現状・目標・問題を把握し、問題点を解決することにより解決を見通した課題を設定できる。 ・問題解決に向けたアプローチを考案することができる。 ・現状・目標・問題の全体像を把握できている。 ・問題解決に繋がる課題を明示できる。 ・問題解決を見通した自分なりのアイデアを示すことができる。 	<p>「身の回りにある問題を自分事として捉え、様々な情報を収集することができる」</p> <p>【具体例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な情報から必要なものを集め、適切に利用できる。 ・問題解決に向け設定した課題について、目標や当事者意識をもって挑戦することができる。 ・問題解決に向け設定した課題に必要な情報が集められている。 ・問題解決に向け設定した課題に繋がるアイデアを出す。 	<p>「周囲の人と関わり、円滑な人間関係を構築できる。人間関係を楽しむことができる。」</p> <p>【具体例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旧来の人間関係を大切にすることができる。 ・周囲の仲間と共に切磋琢磨しながら協力して作業ができる。 ・協力依頼をすることができ、協力体制をつくることができる
C	<p>「現状・問題を把握することができる」</p> <p>【具体例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現状を認識している。 ・目標を認識している。 ・問題(点)が部分的にしか把握できない。 ・問題の所在がわからない。 ・解決すべき問題(点)は明示できるが、取り組むべき課題を設定できていない。 ・自分なりのアイデアを示すことができるが、問題解決につながっていない。 	<p>「身の回りにある問題は分かるが、自分事として捉えられない」</p> <p>【具体例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不十分ではあるが、問題に関する情報は収集はできている ・問題解決につながる情報を集められない ・問題解決につながるアイデアを出さない 	<p>「周囲の人と関わりをもとうと努力している」</p> <p>【具体例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協力依頼をすることはできる ・自分と他者との関係を自分の側からのみしか分析できない。

自己肯定感・自己有用感

「自分一人でも社会を変えられる力を持つと思う」

上記の資質・能力を更に向上させるための要素

「地元に対する愛情」

「地域の魅力が増すと、自分の中での地域に対する愛情が深く大きくなる」ことを知っている。
 海や山などの自然に囲まれた生活を愛している。地元でこれからも住みたいと思う。
 地域住民と触れ合う機会を積極的に作っている。
 自分の住む地域の情報に対して、敏感である。
 地元の悪いところよりも、良いところのほうが目に付く。
 地元で、将来のことや実現したいことを話し合える人がいる。 など

現状	今の状態 (the Present Situation)
問題	目標に向けて立ちほだかるもの、解決すべきもの(the Problem)
課題	目標に向かうにあたり設定し、遂行すべきものや、その手段(the Task)
目標	これから目指すべき姿(the Goal, Target)

このルーブリックは、以下のアプローチを経て作成した。

- ・ 教員による研修で3つの要素を吸い上げ
- ・ 協力してくれる地域の方々からの意見
- ・ 文献によるテキストマイニング
- ・ 先進校の訪問調査
- ・ 地域で活躍する方々へのアンケート
- など

資料4 定量的調査 まとめ

熱海高校における研究開発学校事業の学校改善への効果の定量的調査

－「地域との協働による高等学校教育改革」事業からの検討－

CASP 評価開発グループ

1 はじめに

本研究は、研究開発学校事業¹がもたらす影響を「地域との協働による高等学校教育改革」（以下「地域協働」）事業を題材に、「専門職の学習共同体」（Professional Learning Community:以下 PLC）評価表などを活用しながら分析し、事業の学校改善に対する効果を測ることを目的とする。正の効果が確認できれば、事業は高校が学校改善を志向した際の有効な選択肢となりうるものであると考える。

調査対象となっている静岡県立熱海高等学校（以下、熱海高校）は、創立70年を超える地域の伝統校である。全日制普通科であり、2年次以降は福祉、観光ビジネス、進学、基礎の4つのコースに分かれて学ぶ。近年、地域の児童・生徒数の減少で学級数が減少（一学年のクラス数は、2019年度まで3クラス、2020年度から2クラス）することに加え、定員を充足することができない、いわゆる「定員割れ」の状況が続いている。そのため、地域から選ばれる学校となるべく学校の特色化を図り、その一環として地域との協働によるカリキュラムが開発、実践されてきていた。その流れの延長線に、文部科学省「地域と協働による高等学校教育改革」事業への申請、指定がある。学校改善の方策の一つとして、事業を活用しているといえよう。事業指定を受け1年が経過しようとしているが、その事業に取り組むことで学校にどのような効果もたらされたのかを測ることを、本稿は目的としている。

一言で学校改善と言っても、その姿を捉えるのは容易ではない。高校が期待されている使命や学校経営目標は多様であり、それらに準拠した成果指標も高校ごとに異なり一様に評価するのは難しい。また校内に目を向けると、教員の行うべき業務の中にはかなり裁量の大きい部分が認められ、同じ学校内においても個々の教員レベルでは目指すべき成果が一樣ではない。本稿では学校改善の方向性や状況把握の前提をそろえるために研究開発学校事業、特に地域協働事業に取り組む高校へと焦点化し、事業の学校改善に対する効果の有無を検討したい。

学校改善に関する先行研究において改善をもたらすとされる要素をみると、例えば佐藤（2012）における「学びの共同体」の学校改革の研究では、重要な3つの活動システム²と

¹ 「研究開発学校事業」とは、文部科学省が行う研究開発学校制度、スーパーサイエンスハイスクール事業、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール事業、SGH事業の総称である。この定義は小野まどか（2012）「学校を対象とする研究開発事業に関する考察－研究指定された学校に生じる現象と課題－」『日本教育学会大会研究発表要項』71、p286－287による。

² 佐藤学（2012）『学校を改革する－学びの共同体の構想と実践－』岩波書店、p3。

して教師の学びでの同僚性、保護者の参加、教室での学びの協働を挙げている。また内発的
学校改善の研究では、学校の改善力を高めるためには、「個業性」減縮と豊かな教師間のつ
ながりが必要であるとし、そのためのつなぎ役としてミドルリーダーの重要性が指摘され
ている³。教師の主体性や自律性、そしてそれに裏付けされた分散型組織としての学校経営
が学校改善には有効であるとする⁴ものもある。

翻って海外に目を向けると、欧米、特にアメリカで PLC という概念に基づいた学校改善
の研究がなされている。PLC とは「生徒の学習の改善という共通の目的を目指して、協力
して活動する教育者たち」⁵の集団として学校を捉えることであり⁶、より具体的に言うと「教
師間の相互作用の頻度が高く、教師の行為が共有化された教授・学習の実践と改善に焦点化
された規範によって統治されている学校を説明する概念」⁷であるとされている。PLC では
「共有的・支援的リーダーシップ」、「価値とビジョンの共有」、「集約的な学習と応用」等の
セクションごとに学校を診断し、改善に向けた教員間の対話の資源とする取り組みを行う
など、学校改善手法として期待されている。PLC にはいくつかのモデルがあり、必ずしも
概念として統一されてはいない⁸が、この研究の分析指標であるセクションは、学校改善の
手がかりを示すものと言えよう。

以上を踏まえれば、学校改善に必要な要素としては、管理職によるリーダーシップに導か
れた目的やビジョン⁹の共有、分散型組織特性、ミドルリーダーの活躍、教師の学びへの姿
勢、協働性、保護者の参加を挙げることができよう。本研究では、これら要素を学校改善の
指標とし、その状況が改善、向上することをもって学校改善と定義する。

一方、地域協働事業を含む研究開発学校事業の研究動向についてみると、カリキュラムや
教育手法開発、生徒の変容などの事例報告、エスノグラフィーが中心であり、事業を行うこ

³ 佐古秀一（2007）「第3章 学校改善と組織変革 —学校組織の個業化、統制化、協働
化の比較を通して」（北神正行・高橋香代編『学校組織マネジメントとスクールリーダ
ー スクールリーダー育成プログラム開発に向けて』学文社、p64。）

⁴ 露口健司（2012）『学校組織の信頼』大学教育出版、p107。

⁵ 織田泰幸（2011）「「学習する組織」としての学校に関する一考察 —Shirley M.Hord の
「専門職の学習共同体」論に注目して—」『三重大学教育学部研究紀要』第 62 巻、
p211。

⁶ Hord, S., “Professional learning communities: Educators work together toward a shared
purpose” Journal of Staff Development, 30(1), 2009, p40。

⁷ 露口健司（2013）「専門的な学習共同体（PLC）が教師の授業力に及ぼす影響のマルチ
レベル分析」『日本教育経営学会紀要』第 55 号、p66。

⁸ 坂田哲人（2013）「PLC（Professional Learning Community）に関する議論の整理 教
師の専門性発達の観点から」『青山インフォメーションサイエンス』Vol41、p224。

⁹ アンケートに際して、ビジョンを「学校が達成すべき課題とそのため的手段ないし方法
論のセット」と定義した。この定義は佐古秀一（2013）「学校で「組織」がうまく動く
ための条件—内発的改善力を高める学校組織マネジメントのポイント」（『月刊 教職研
修』6月号、教育開発研究所、p25）における定義を用いた。

とは学校改善に寄与する¹⁰としながらも、個別事例の中で述べられている¹¹に留まるものが多い。特定の事業全体を捉えたものとしては、文部科学省による調査¹²¹³があり、事業の効果を定量的に把握しようとしているが、教師の学びへの姿勢、協働性、ミドルリーダーの活躍、目的やビジョンの共有などといった面での学校改善についてはあまり触れられていない。従来の研究では、研究開発学校事業の成果を上記のように定義した学校改善の指標を用い、定量的調査に基づき学校改善に効果があると明確に示した研究はないことから、本研究は一定の意義を有すると考える。

なお、本研究はスーパーグローバルハイスクール事業を題材とした同様の分析の研究¹⁴とほぼ同様の手法を用いて行っている。

2 分析枠組

本研究では主として地域協働業指定校を対象に学校の様子を問うアンケート調査を実施した。アンケートに使用する調査票は日本における学校改善研究の視点に、PLCの研究成果を加えて作成した。PLC研究では学校がPLCになっているかを測定するためのツール「PLC評価表」¹⁵が開発されている。これは、上述したように「共有的・支援的リーダーシップ」(分散型リーダーシップ)、「価値とビジョンの共有」、「集合的な学習と応用」(教員の集合的な学び)、「個人的な実践の共有」(教員の学びのフィードバック)、「支援的状态-関係」(教員や生徒との関係性)、「支援的状态-構造」(関係構築への主としてハード面での支援)の6セクションに包含される設問で構成され、学校状態の把握や学校改善への資源という形で活用されている。本来、この評価表はPLCの状態の学校づくりに向けた当該学校での教員間における対話のためのツールであると解されるが、PLCの状態への到達度や成熟度を測るために作られたものであり、学校の当事者が回答するという形をとる本研究でも有効と考え、設問として援用した。このPLC評価に関わる設問として23問を設けた。

¹⁰ 天笠茂(2001)「教育課程の創造と学校経営」『日本教育経営学会紀要』43、pp140-146。

¹¹ 事業成果報告では効果の中に教員の協働性の高まりなどを指摘するものは多い。例えば、町博光ほか(2009)「第1部 文部科学省研究開発学校 研究開発実施報告 平成20年度(延長第3年次):中等教育における科学を支える「リテラシー」の育成を核とする教育課程の開発」『中等教育研究紀要』49、p97。

¹² 文部科学省 HP「SELHiに関するアンケート(表)」[http://www.mext.go.jp/a_menu/okusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2010/05/20/1293205_1.pdf] (2015.7.21 確認)

¹³ 文部科学省 科学技術・学術政策研究所 第1調査研究グループ 小林淑恵・小野まどか・荒木宏子(2015)「スーパーサイエンスハイスクール事業の俯瞰と効果の検証」DISCUSSION PAPER No. 117、科学省科学技術・学術政策研究所 HP [www.nistep.go.jp/wp/wp-content/.../NISTEP-DP117-FullJ.pdf] (2015.5.7 確認)

¹⁴ 野田正人「研究開発学校事業の学校改善への効果の定量的調査—スーパーグローバルハイスクール事業からの検討—」『教育行財政研究』44巻(2017)

¹⁵ 織田泰幸(2014)「専門職の学習共同体」としての学校に関する基礎的研究(2):ツールの活用をめぐる」『三重大学教育学部研究紀要』65、pp375-376。

それに加え、PLC 評価以外について学校改善に有効であると思われる指標として「ミドルリーダー活性」¹⁶（管理職と一般教員を繋ぎ、上の意見を下に浸透させ、下からの意見を集約して上に届けて学校意思決定に反映させる姿を問うもの。ここではミドルリーダーを「主任層教員」とした）、学校改善の変革期に発揮される「変革型リーダーシップ」¹⁷、内発的な改善意欲の生起に必要とされる、自分の意思で行為を選択できているとの実感や自分の影響力で学校に変化を生起させたという実感を示す「自己統制感・教師効力感」¹⁸、「管理機関の支援」¹⁹、「保護者や地域の関与」²⁰の5つのセクション計18問を追加した。これら設問について、熱海高校が地域協働事業の指定を受けて研究開発を始める直前の状態（以下、事業指定直後）と現在の状態（以下、事業指定10ヶ月経過後）の2つを「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法で尋ね、「あてはまらない」を1、「あてはまる」を4と数値化して集計した。

3 調査概要

事業指定直後のアンケートは2019年4月下旬に、事業指定10ヶ月経過後のアンケートは2020年1月下旬に実施した。アンケート対象者は事業指定校に勤務する教諭および常勤講師である。調査票は4月実施で対象者26名中17名、1月実施は21名から回答を得た。

また、比較のために地域協働事業指定校ではない高校にも同じ調査票を郵送し回答を求めた。対照群として中部地方のX県にある全日制県立高校2校に協力を求めた。X県は本州中央部に位置し、対象校は本校の所在する地域同様、人口逡減の激しい地域に所在する。学校はともに沿岸部に位置するとともに、海にせり出した急峻な山間地を後背部に有しており、本校所在地と地形的に酷似する。さらにA高校（商業科）は一学年3クラス、B高校（普通科）は2クラスと、本校と生徒数的にも状況が類似する。以上の理由からこの2校についても同様のアンケートに協力を求め、2度にわたるアンケートの結果を熱海高校のものと比較する。A高校からは4月実施で28名中26名、1月実施で25名より、B高校からは4月実施で25名中22名、1月実施で19名より回答を得た。

¹⁶ 大脇康弘（2013）「ミドル・アップダウン型組織の構想と展開」『第13回スクールリーダーフォーラム 学校づくり実践を物語る』p34-35

¹⁷ 露口健司（2008）『学校組織のリーダーシップ』大学教育出版、p35。

¹⁸ 佐古秀一・宮根修（2011）「学校における内発的改善力を高めるための組織開発（学校組織開発）の展開と類型—価値的目標生成型の学校組織開発の展開を踏まえて—」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第26巻、p128。

¹⁹ 「管理機関」とは、ここではその学校が所属する都道府県の教育委員会のことをさす。

²⁰ 「管理機関の支援」「保護者や地域の関与」セクションは、PLC評価表では「利害関係者」とまとめられており、日米間ではその意味するところが異なること、「利害関係者」では回答者がイメージしにくいことから設問として分離した。本来の意味するところと異なるため、別のセクションとした。

4 調査結果および考察

(1) セクションごとの比較²¹

① PLC 評価に関するセクション

まず、事業指定直後の熱海高校（熱海4月）と、A高校（A高4月）・B高校（B高4月）を比較²²する。「共有的・支援的リーダーシップ」セクションはB高校が高く、次いで熱海、A高校という順序であった。「集合的な学習と応用」セクションはA高校、熱海、B高校という順であった（いずれのセクションも有意差はない）。一方で「ビジョンと価値観の共有」「個人的な実践の共有」「支援的状态（関係）」「支援的状态（構造）」は熱海高校の方が高い結果となった。熱海高校が高いとするセクションについては、他校と有意差があるものが多い。

表 1 セクション間の比較（PLC 評価に関するセクション 4月）

	共有的・支援的リーダーシップ (分散型リーダーシップ)			ビジョンと価値観の共有			集合的な学習と応用		
	熱海4月	A高4月	B高4月	熱海4月	A高4月	B高4月	熱海4月	A高4月	B高4月
スコア	14.00	12.96	14.45	8.59	8.08	7.86	16.41	16.92	14.82
%	70.0	64.8	72.3	71.6	67.3	65.5	82.1	84.6	74.1
	t検定			t検定			t検定		

	個人的な実践の共有			支援的状态(関係)			支援的状态(構造)		
	熱海4月	A高4月	B高4月	熱海4月	A高4月	B高4月	熱海4月	A高4月	B高4月
スコア	9.71	9.12	8.05	6.41	5.73	6.00	11.41	10.81	10.00
%	80.9	76.0	67.0	80.1	71.6	75.0	71.3	67.5	62.5
	t検定			※			t検定		
	熱海高校との比較のt検定			※P<0.05 ※※P<0.01 ※※※P<0.001			※		

ここから、熱海高校は他の2校と比べ比較的PLCの想定している理想的な状況に近くなっているが、その違いはそれほど大きな違いではない。これは熱海高校を含めた3校が、4月の段階ではほぼ同じような状態であるということであろう。

次に事業指定直後10ヶ月経過後の熱海高校（熱海1月）と、A高校（A高1月）・B高校（B高1月）を比較する。

²¹ 表1、表2は静岡県の高校、SGHの高校の実施前後といった学校の属性ごとの回答をセクション単位でまとめたものである。表中の「平均」とは、セクション内の質問項目に対する回答を、学校属性ごとに集計したもので、この数値が高い方がより肯定的な回答をしているということになる。セクションごとの質問数は均一ではないので、それぞれのセクションごとの質問に対しすべて「あてはまる」と回答した場合を満点とし、それに対して「平均」がどの程度の割合であるかを「%」で表示した。

²² セクション間の平均値の違いについては、t検定を行い有意差の有無を表記した。表の下にある検定結果は「熱海高校とA高校」「熱海高校とB高校」で行ったものであり、P値を段階的に区分し表記した。表中の「%」は、「セクション内の回答がすべて「あてはまる」と答えたものを満点のポイントとした際に、各学校のセクションの合計に対してどの程度のポイントであったのか」を割合で示したものである。

表 2 セクション間の比較 (PLC 評価に関するセクション 1月)

	共有的・支援的リーダーシップ (分散型リーダーシップ)			ビジョンと価値観の共有			集合的な学習と応用		
	熱海1月	A高1月	B高1月	熱海1月	A高1月	B高1月	熱海1月	A高1月	B高1月
スコア	15.46	12.32	14.84	8.29	7.04	8.44	16.75	15.84	16.21
%	77.3	61.6	74.2	69.1	58.7	70.4	83.8	79.2	81.1
	t検定	***		t検定	*		t検定		

	個人的な実践の共有			支援的状态(関係)			支援的状态(構造)		
	熱海1月	A高1月	B高1月	熱海1月	A高1月	B高1月	熱海1月	A高1月	B高1月
スコア	9.29	8.25	9.11	6.25	5.46	5.32	11.67	10.25	10.44
%	77.4	68.8	75.9	78.1	68.2	66.4	72.9	64.1	65.3
	t検定			t検定	*	*	t検定	*	
	熱海高校との比較のt検定 ※P<0.05 ***P<0.01 ****P<0.001								

「ビジョンと価値観の共有」以外のすべてのセクションで、熱海高校が最も高いポイントを示している。特に「共有的・支援的リーダーシップ(分散型リーダーシップ)」がA高に比べて、「支援的状态(関係)」がA高・B高両方に比べ有意に異なっている。以上のことから、熱海高校は事業指定後の取組を経験することで、他の高校よりもPLCの想定している理想的な状況になっていると言える。なお、A高校では、すべてのセクションにおいて4月に比べて1月のポイントが下がっている。

では、いかなるセクションが特に強められることになるのか。熱海高校の事業指定直後(熱海4月)と事業指定10ヶ月経過後(1月)を比較する。

表 3 セクション間の比較 (PLC 評価に関するセクション 熱海4月・1月)

	共有的・支援的リーダーシップ (分散型リーダーシップ)		ビジョンと価値観の共有		集合的な学習と応用	
	熱海4月	熱海1月	熱海4月	熱海1月	熱海4月	熱海1月
スコア	14.00	15.46	8.59	8.29	16.41	16.75
%	70.0	77.3	71.5	69.1	68.4	69.8
	t検定		t検定		t検定	

	個人的な実践の共有		支援的状态(関係)		支援的状态(構造)	
	熱海4月	熱海1月	熱海4月	熱海1月	熱海4月	熱海1月
スコア	9.71	9.29	6.41	6.25	11.58	11.67
%	80.9	77.4	80.1	78.1	72.4	72.9
	t検定		t検定		t検定	
	t検定 ※P<0.05 ***P<0.01 ****P<0.001					

事業による活動が進展していく中で比較的強められているのは「共有的・支援的リーダーシップ(分散型リーダーシップ)」(P=0.07)であった。他は大きな変化がない。有意差を持って減少しているものはなく、維持されているというところであろう。他校と比較したものは、「集合的な学習と応用」「個人的な実践の共有」「支援的状态(関係)」「支援的状态(構造)」セクションは熱海高校の方が比較的高かった。ただし、事業進展により向上したという捉え方はできない。

② PLC 評価以外に関するセクション

熱海高校と他の高校について、事業指定直後（4月）と事業指定 10 ヶ月経過後（1月）を比較する。

表 4 セクション間の比較（PLC 評価以外に関するセクション 4月）

	変革型リーダーシップ			ミドルリーダー活性			自己統制感・教師効力感		
	熱海4月	A高4月	B高4月	熱海4月	A高4月	B高4月	熱海4月	A高4月	B高4月
スコア	16.71	15.38	16.91	9.35	8.27	8.86	8.76	8.42	8.23
%	69.6	64.1	70.5	77.9	68.9	73.8	73.0	70.2	68.6
	t検定			t検定	※※		t検定		

	管理機関の支援			保護者や地域の関与		
	熱海4月	A高4月	B高4月	熱海4月	A高4月	B高4月
スコア	8.24	6.60	6.38	7.47	7.46	8.64
%	68.6	55.0	53.2	62.3	62.2	72.0
	t検定	※	※	t検定		※
	熱海高校との比較のt検定 ※P<0.05 ※※P<0.01 ※※※P<					

「ミドルリーダー活性」「管理機関の支援」が他校と比べて有意に高く、「自己統制感・教師効力感」は比較的高いポイントとなった。文科省の事業を申請する前の高校の状態として、他校と比較してミドルリーダーの活動が活発であり、管理機関の支援を教員が感じるような従前からのつながりが見られること、そして教員が自らの教育的活動で学校の状態を変えることができるという認識があることが想定される。

表 5 セクション間の比較（PLC 評価以外に関するセクション 1月）

	変革型リーダーシップ			ミドルリーダー活性			自己統制感・教師効力感		
	熱海1月	A高1月	B高1月	熱海1月	A高1月	B高1月	熱海1月	A高1月	B高1月
スコア	19.38	14.48	16.79	9.50	8.00	9.28	9.13	7.75	8.50
%	80.7	60.3	70.0	79.2	66.7	77.3	76.0	64.6	70.8
	t検定	※※※	※※	t検定	※		t検定	※※※	

	管理機関の支援			保護者や地域の関与		
	熱海1月	A高1月	B高1月	熱海1月	A高1月	B高1月
スコア	8.04	5.92	6.61	7.88	6.84	8.56
%	67.0	49.3	55.1	65.6	57.0	71.3
	t検定	※※※	※	t検定	※	
	熱海高校との比較のt検定 ※P<0.05 ※※P<0.01 ※※※P<0.001					

「保護者や地域の関与」を除く全てのセクションにおいて、熱海高校が他校に比べて有意に高いポイントとなった。特に「変革型リーダーシップ」「管理機関の支援」は両校に対して、「自己統制感・教師効力感」は特にA高校に対して有意な差を見せている。

なお、A高校では、すべてのセクションにおいて4月に比べて1月のポイントが下がっている。

熱海高校自体の変化はどうであろうか。

表 6 セクション間の比較(PLC 評価以外に関するセクション 熱海4月・1月)

	変革型リーダーシップ		ミドルリーダー活性		自己統制感・教師効力感	
	熱海4月	熱海1月	熱海4月	熱海1月	熱海4月	熱海1月
スコア	16.71	19.38	9.35	9.50	8.76	9.13
%	69.6	80.7	77.9	79.2	73.0	76.0
	t検定	※※	t検定		t検定	

	管理機関の支援		保護者や地域の関与	
	熱海4月	熱海1月	熱海4月	熱海1月
スコア	8.24	8.04	7.47	7.88
%	68.6	67.0	62.3	65.6
	t検定		t検定	
	t検定	※P<0.05 ※※P<0.01 ※※※P<0.001		

「管理機関の支援」以外、すべてのセクションでポイントが上昇している。特に、「変革型リーダーシップ」セクションが特に強く表れるようになった。「管理機関の支援」は、熱海高校は他校に比べ事業前から比較的強く意識されていた。文科省の事業に指定されるのは高校そのものではなく管理機関であるため、管理機関との関係が意識される状態が継続しているということであろう。

以上の分析から、PLCに関する側面では、事業指定を受け活動を展開することで全体的に強められる、あるいは維持されるといった様相が見られ、特に「共有的・支援的リーダーシップ」が強められるなど、学校改善への正の効果が見られた。また、PLC以外の側面でもほぼすべてのセクションで向上が見られた。特に「変革型リーダーシップ」が強められた。

文科省事業指定を受け、取組を展開することでリーダーシップのあり方を中心に学校改善への効果が見られると言えよう。

(2) セクション間の相関

次に、セクション間ではどのような相関が見られるのかを検討する。

まず熱海高校では、4月(表7)と1月(表8)を比較して全体的に相関を持つセクションが増えていることがわかる。これは事業指定後の取組を行う中で、それぞれのセクション間で関係が作られるようになってきたことを予想させる。比較的強い相関がみられたものは「共有的・支援的リーダーシップ」「ビジョンと価値観の共有」が時間の経過とともに変化し、他のセクションに対して強い相関を持つようになってきている。

A高校では、4月の段階(表9)では熱海高校に比べて相関を持つものが少なかったが、1月(表10)では強い相関を持つものが増えている。これは時間とともに相関を持つようになるということであるが、表1, 表2, 表4, 表5におけるA高校のセクションのポイントを見ればわかることだが、A高校ではすべてのセクションでポイントを下げている。ここから、低いポイントでそれぞれの関係性が作られていることになる。熱海高校の「ポイントが向上する過程で関係性が構築された(相関関係が見られるようになった)」という状態とは異なる。

B高校では、4月段階(表11)では熱海高校に比べ相関関係を持つ項目が多かったが、1月(表12)では相関を持つものが減少している。特に「ビジョンと価値観の共有」「共有的・支援的リーダーシップ」セクションでは他セクションとの相関が薄まっている。熱海高校の状況と逆である。

表 7 熱海高校事業指定直後（4月）のセクション相関(n=17) 色分けは相関係数>0.4

以下同じ

	共有的・支援的	変革型リーダーシップ	ミドルリーダー	ビジョンと価値観の共有	集合的な学習と応用	個人的な実践の共有	支援的状态(関係)	自己統制感・教師効力感	支援的状态(構造)	管理機関の支援	保護者の関与
共有的・支援的リーダーシップ	1										
変革型リーダーシップ	0.8372303	1									
ミドルリーダー	0.43292567	0.3887734	1								
ビジョンと価値観の共有	0.82991905	0.5197587	0.4544232	1							
集合的な学習と応用	0.41917848	0.2870457	0.410771	0.4586598	1						
個人的な実践の共有	0.12784824	0.1679304	0.1399999	0.2092093	0.4721294	1					
支援的状态(関係)	0.16950442	0.2798982	0.12065	0.2423381	0.4754445	0.7948093	1				
自己統制感・教師効力感	-0.0247003	-0.003973	-0.091287	-0.09573	0.6504435	0.639025	0.5506893	1			
支援的状态(構造)	0.55266263	0.7087139	0.4354927	0.4129486	0.2584334	0.042265	0.1357672	-0.169845	1		
管理機関の支援	0.69019051	0.6017399	0.7490433	0.2561715	0.3009533	-0.06377	0.0169095	-0.036961	0.4296339	1	
保護者の関与	0.25251919	0.3073185	-0.107152	0.2327077	-0.150908	-0.057162	-0.242517	-0.274515	0.2499618	-0.1028631	1

表 8 熱海高校事業 10ヶ月経過後（1月）のセクション相関(n=24)

	共有的・支援的	変革型リーダーシップ	ミドルリーダー	ビジョンと価値観の共有	集合的な学習と応用	個人的な実践の共有	支援的状态(関係)	自己統制感・教師効力感	支援的状态(構造)	管理機関の支援	保護者の関与
共有的・支援的リーダーシップ	1										
変革型リーダーシップ	0.72713998	1									
ミドルリーダー	0.78400782	0.82913086	1								
ビジョンと価値観の共有	0.64067464	0.65210206	0.53923384	1							
集合的な学習と応用	0.44995519	0.47524837	0.51325261	0.60132467	1						
個人的な実践の共有	0.41136864	0.57540912	0.5169588	0.69524334	0.65453488	1					
支援的状态(関係)	0.62081419	0.64825098	0.58202525	0.65740219	0.35073145	0.62849723	1				
自己統制感・教師効力感	0.49155164	0.54310803	0.49378881	0.44183685	0.19679876	0.41941341	0.66978752	1			
支援的状态(構造)	0.6555328	0.53869332	0.56015472	0.62913228	0.35223697	0.438185	0.59408853	0.39791311	1		
管理機関の支援	0.4958253	0.40843677	0.41790299	0.53636907	0.36205143	0.46109366	0.41197595	0.54262619	0.49338529	1	
保護者の関与	0.50085546	0.26193493	0.21657404	0.19531844	0.00207157	0.02899171	0.32249031	0.32923077	0.11790018	0.21656382	1

表 9 A 高校 4月のセクション相関(n=26)

	共有的・支援的	変革型リーダーシップ	ミドルリーダー	ビジョンと価値観の共有	集合的な学習と応用	個人的な実践の共有	支援的状态(関係)	自己統制感・教師効力感	支援的状态(構造)	管理機関の支援	保護者の関与
共有的・支援的リーダーシップ	1										
変革型リーダーシップ	0.54181439	1									
ミドルリーダー	0.51009553	0.6314947	1								
ビジョンと価値観の共有	0.36963358	0.63439674	0.56238738	1							
集合的な学習と応用	0.27120877	0.04333851	0.37806068	0.32557134	1						
個人的な実践の共有	0.49562904	0.3418914	0.55202603	0.45512592	0.6703891	1					
支援的状态(関係)	0.39366029	0.38339432	0.47573668	0.51133455	0.42910525	0.56144836	1				
自己統制感・教師効力感	0.2524844	0.14155359	0.45405525	0.32540452	0.29592439	0.24819277	0.52157473	1			
支援的状态(構造)	0.23911788	0.19067399	0.37818411	0.31840617	0.56848852	0.58942292	0.50648113	0.40293092	1		
管理機関の支援	0.29040742	0.27800218	0.5440416	0.36619809	0.57915934	0.54684441	0.3671516	0.30420261	0.75949591	1	
保護者の関与	-0.0468148	0.02136385	0.36079585	0.16148114	0.4010028	0.26004439	0.26006578	0.39742919	0.50377872	0.35533453	1

表 10 A 高校 1月のセクション相関(n=24)

	共有的・支援的	変革型リーダーシップ	ミドルリーダー	ビジョンと価値観の共有	集合的な学習と応用	個人的な実践の共有	支援的状态(関係)	自己統制感・教師効力感	支援的状态(構造)	管理機関の支援	保護者の関与
共有的・支援的リーダーシップ	1										
変革型リーダーシップ	0.82410106	1									
ミドルリーダー	0.60734021	0.6778800	1								
ビジョンと価値観の共有	0.36800399	0.24035671	0.63219623	1							
集合的な学習と応用	0.22712819	0.15117499	0.48966297	0.32119813	1						
個人的な実践の共有	0.23880603	0.16034997	0.40357003	0.56142297	0.80721128	1					
支援的状态(関係)	0.41415216	0.35286588	0.60127888	0.62361183	0.76660413	0.64787473	1				
自己統制感・教師効力感	0.46839439	0.30333998	0.6069044	0.66854174	0.75463238	0.54127213	0.7698512	1			
支援的状态(構造)	0.42575122	0.38920155	0.55336946	0.41403486	0.56223532	0.54805069	0.60122662	0.32457555	1		
管理機関の支援	0.20796834	0.22259782	0.39901194	0.5673746	0.52220111	0.26624671	0.26813042	0.38705463	0.46328341	1	
保護者の関与	0.21171303	0.13970229	0.54280093	0.54860045	0.70488157	0.57517568	0.7680184	0.6825236	0.5960209	0.47797859	1

表 11 B 高校 4月のセクション相関(n=22)

	共有的・支援的	変革型リーダーシップ	ミドルリーダー	ビジョンと価値観の共有	集合的な学習と応用	個人的な実践の共有	支援的状态(関係)	自己統制感・教師効力感	支援的状态(構造)	管理機関の支援	保護者の関与
共有的・支援的リーダーシップ	1										
変革型リーダーシップ	0.7131511	1									
ミドルリーダー	0.56156909	0.7218895	1								
ビジョンと価値観の共有	0.40442371	0.5254084	0.64033968	1							
集合的な学習と応用	0.42335586	0.6864427	0.39475774	0.55456664	1						
個人的な実践の共有	0.42751038	0.49419757	0.46312737	0.8418458	0.64049539	1					
支援的状态(関係)	0.05346614	0.17265948	0.4573252	0.6455676	0.44508781	0.57046286	1				
自己統制感・教師効力感	0.55370241	0.68738368	0.71230119	0.48665388	0.60862287	0.81459875	0.28606505	1			
支援的状态(構造)	0.52342215	0.61126983	0.61607801	0.59981867	0.64478141	0.49395383	0.41602515	0.45701859	1		
管理機関の支援	0.32842099	0.48372955	0.19890779	0.32058085	0.4767472	0.15698887	0.27645189	0.12537948	0.59945096	1	
保護者の関与	0.21630758	0.39049614	0.45199169	0.42168524	0.36360059	0.24095447	0.52151512	0.06228693	0.57978393	0.54371558	1

表 12 B 高校 1 月のセクション相関 (n = 18)

	共有的・支援的	変革型リーダーシップ	ミドルリーダー	ビジョンと価値観の共有	集合的な学習と応用	個人的な実践の共有	支援的状态(関係)	自己統制感・教師効力感	支援的状态(構造)	管理機関の支援	保護者の関与
共有的・支援的リーダーシップ	1										
変革型リーダーシップ	0.8871017	1									
ミドルリーダー	0.59350051	0.53022914	1								
ビジョンと価値観の共有	0.20057133	0.26369776	0.46460089	1							
集合的な学習と応用	0.4455462	0.47313767	0.51602363	0.10602809	1						
個人的な実践の共有	0.56394038	0.63748043	0.64188868	0.46358509	0.74253886	1					
支援的状态(関係)	-0.0357771	0.04001283	0.19958207	0.09243697	0.24359097	0.16032753	1				
自己統制感・教師効力感	0.47512951	0.63451631	0.66294966	0.20420294	0.35760445	0.6681733	0.5610552	1			
支援的状态(構造)	0.11901652	0.29138284	0.31486081	0.167206	0.58658895	0.53328665	0.75830814	0.9045467	1		
管理機関の支援	-0.312633	-0.3761125	0.06563103	-0.0847293	0.24851278	-0.1750687	0.20523587	-0.0355652	0.39765998	1	
保護者の関与	0.01121985	-0.1106668	0.21637695	-0.1908177	0.3027519	0.13625577	0.15826822	0.14679822	0.1163422	0.24668478	1

前節でみたように、熱海高校と A 高校・B 高校においては (表 1 および表 4)、一部のセクションを除けばセクションごとでの値に大きな違いはない。しかしセクション間の相関となると、時間の経過 (事業の進展) とともに熱海高校の方が強められている。これは事業指定を受け、取組を継続することで、それぞれの個別の取組の間につながりが形成されているのではないかと推測される。

特に「ビジョンと価値観の共有」「共有的・支援的リーダーシップ」セクションを軸に、より多くのセクション間で相関を持つように変化する。

実際、学校の持つ事業等の経験ごとにスーパーグローバルハイスクール事業を題材にした研究でも同様の傾向が見られたとの先行研究²³がある。

(3) 協働性のスコアの比較

学校内のつながりを特に教員の協働として捉えた時、その協働性の程度に差はないかについて、ここでは教員間の協働を「専門的知識・技術の伝達、課題や問題の調整・共有、学校の実態に応じた指導の改善を目的とした教員間の相互支援」として捉えている先行研究²⁴をもとに、本調査で行ったアンケートの中で、それに該当するセクション「ビジョンと価値観の共有」「集合的な学習と応用」「個人的な実践の共有」「支援的状态-関係」のスコアを合計し (以下、協働性スコア)、スコアが高い高校は協働性が高いと仮定して考えてみる。

表 13 協働性スコア比較

協働性スコア	
熱海4月	熱海1月
41.25	40.58
A高校4月	A高校1月
39.85	36.04
B高校4月	B高校1月
36.73	38.63

結果は、熱海高校のスコアが他校よりも高かった。ここから、熱海高校は協働性が高い学校であることがうかがわれる。ただし、事業の経過の進展とともに変化しているというよりも、もともと高い協働性があったという方が正しい。事業を行うことでの変化は確認することができない。

先行研究では学校が有する経験ごとに協働性スコアは異なり、研究開発学校事業経験のある高校が最も高く、経験のない高校が最も低くなるという傾向があることが確認されている²⁵。熱海高校は現在の事業指定の前に、文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた授業改善のための調査研究事業」に指定 (平成 28~30 年の 3 年指定) された経験がある。そういった「学校の経験値」が高いことが協働性スコアの高止まりに影響している可能性がある。

²³ 野田 (2017) 前掲書

²⁴ 三浦智子 (2014) 「教員間の協働の促進要因に関する計量的分析 - 学校組織の社会的・制度的環境に着目して -」『日本教育行政学会年報』No.40、p130。

²⁵ 野田 (2017) 前掲書

ところで、表7において、「管理機関の支援」セクションは主としてリーダーシップに関わるセクションとの相関が強く見られていたが、表8において強い相関がみられなくなる点が挙げられる。すでに筆者は別稿において、スーパーグローバルハイスクール事業の申請に対する管理機関の関与の程度と教員側の事業に対する協力度について分析し、関与の難しさを指摘した²⁶。セクション間の相関についても学校改善に対する管理機関からの支援の難しさを示している。

(4) 学校の課題認識について

アンケートでは、教員に対し「学校の課題として認識しているものは何か」(複数回答可)も尋ねた。事業の進展や時間の経過とともに変化をとらえたい。

図1 学校課題として認識しているもの(4月) ※全回答者数に対し項目を選んだ者の割合(%)

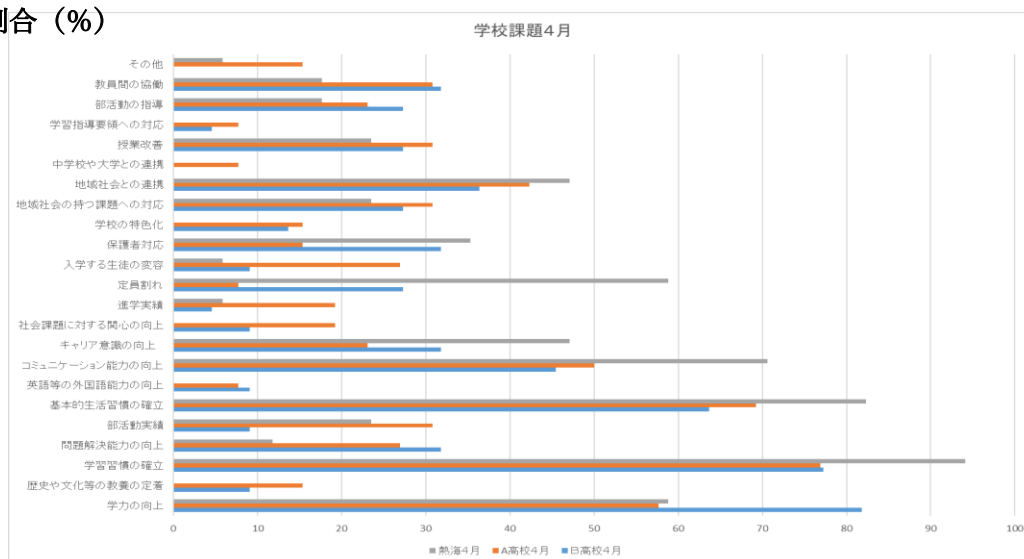
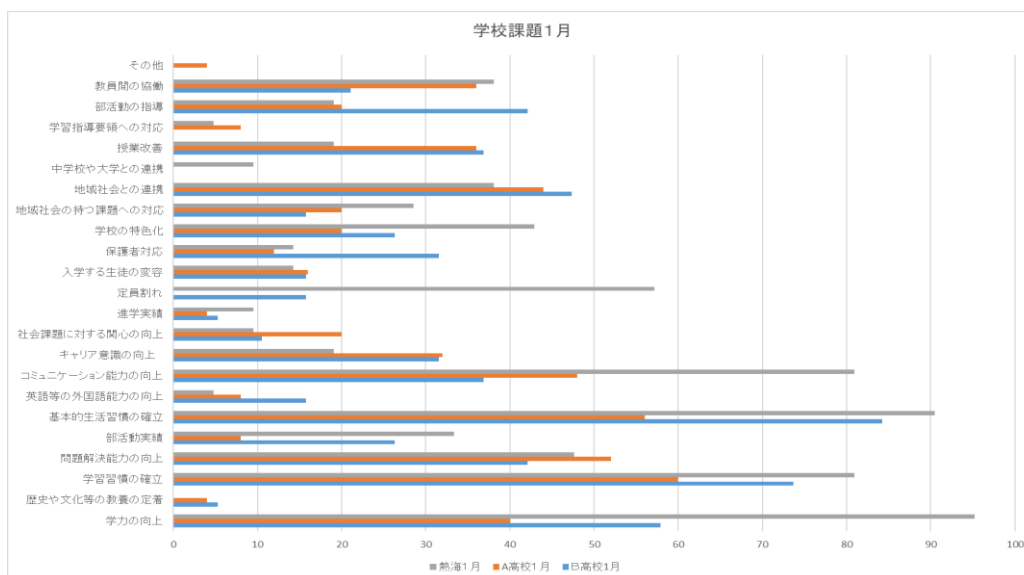


図2 学校課題として認識しているもの(1月) ※全回答者数に対し項目を選んだ者の割合(%)



²⁶ SGH 指定校への管理機関の支援の在り方については、野田 (2016) 「スーパーグローバルハイスクール事業の数量的調査 申請過程の実態とその影響について」(『教育行財政論叢』第13号) 参照。

4月時点の熱海高校において特徴的に強く認識されていた課題は「保護者対応」「定員割れ」、他校でも同様に高いものの熱海高校が抜きんでて高く認識されていたものとして「キャリア意識の向上」「コミュニケーション能力の向上」「基本的生活習慣の確立」「学習習慣の確立」が挙げられる。他校と同程度に高く認識されていたものでは「地域社会との連携」「地域社会の持つ課題への対応」がある。一方、「学力の向上」「教員間の協働」は他校に比べ課題としての認識が低い。

1月段階の熱海高校では、特徴的に強く認識されていた課題や他校と同様に高いものは基本的に変化が見られない一方で、「教員間の協働」「学力の向上」といった他校に比べ課題としての認識が低かったものが他校と同程度、あるいは他校よりも強く認識されるようになった。さらに「学校の特色化」は4月時点では課題として挙がっていなかったものが、1月時点では半数近くの教員が課題として認識するように変化した。「問題解決能力の向上」は他校と同程度に課題として認識されるようになった。半面、「保護者対応」「キャリア意識の向上」は半減している。

3校共通で強く認識されていたもの（「キャリア意識の向上」「コミュニケーション能力の向上」「基本的生活習慣の確立」「学習習慣の確立」「地域社会との連携」「地域社会の持つ課題への対応」）は4月時点でも1月時点でも同様であることから、どの学校にも普遍的に存在する課題であろう。一方で「教員間の協働」「学力の向上」「問題解決能力の向上」「学校の特色化」は事業指定後の取組を経ることで強められると考えられる。その背景には「定員割れ」が熱海高校では強く認識されていることから考えると、学校の置かれている状況に対する危機感がベースにあり、事業を展開することで現状改善につながる方策として「教員間の協働」「学力の向上」「問題解決能力の向上」「学校の特色化」が具体的に意識され、課題として認識されることになったと思われる。

（5）考察

以上の調査の結果から、事業を学校改善ツールとして考えたとき、本事業が有効である側面として1つにはリーダーシップのあり方を中心にPLCの様相が強められることが挙げられる。特に「共有的・支援的リーダーシップ（分散型リーダーシップ）」が強くなされ他のセクションへの影響が生じる、という改善へのサイクルが期待できる可能性がある。

2つめとして、事業を行うことでセクション間の相関が高まることが確認されたことから、学校内のいろいろな取組の間につながりが形成され、取組が有機的に連携していくことの可能性がある。課題研究型授業や新しいカリキュラムの開発は、教科・分掌横断的な取組になりやすいために、学校内のつながりが形成されると思われる。個々の教員間の関係を生み出し、強めることが事業を行うことによって期待できる効果であると言える。

一方で効果が現時点の分析ではあまり期待できにくい側面もある。「集合的な学習と応用」「個人的な実践の共有」「支援的状态（関係）」「支援的状态（構造）」のセクションについては熱海高校は他校と比べて高いものの、有意に高く変化したわけではなかった。個人的に身につけたものを日常的にフィードバックし合うような関係に発展させるにはまだ不十分であるということである。教科担任制であることや、分掌、部活動の単位で自律性を競い合う

ような高校特有の文化²⁷などが、そのセクションの向上を今一步のところに押しとどめているのかもしれない。

5 結果の要約と今後の課題

本研究を通して、事業が PLC の様子を部分的に強めるという意味での学校改善に有効であるという可能性を示せた一方で、事業が万能ではないことも確認することができた。事業を学校改善のツールとして考える際には、高校ごとの課題や目標にあった形で、どのような点を改善したいのかということ熟考する必要があり、それが事業の本来の趣旨・目的に加え、本研究で示したような教員の学びへの姿勢や協働性の構築という方向であるならば、事業を活用することは有効であると考え。ただ、本研究を行った時点では事業開始して時間が経過しておらず、3年間の指定期間を通して、事業終了後にどのような変化を学校に残したのかということが本当の意味での成果であると思う。今後の課題としたい。

²⁷ 佐藤学(2013)「第1章 高校改革の課題」『授業と学びの大改革 「学びの共同体」で変わる！ 高校の授業』明治図書、p19。

校内地域連携推進委員会

概要

事業の指定を受けてから、今年度本校で開かれた「校内地域連携推進委員会」の活動内容を紹介していく。

● 4/26（金）文科省指定委託事業 第1回校内連携推進委員会（CASP会議）開催 CASP（Community Activation Support Project）

4月26日に文科省指定委託事業第1回校内連携推進委員会（CASP会議）を開催した。委員は静岡文化芸術大学文化政策学科准教授船戸修一准教授、地域協働学習実施支援員の水野綾子さん。一緒に“地域の課題に立ち向かい、地域のために貢献できる人材”の育成を目指し、協議する。第1回はこれまでの高校生ホテル、1年の熱高ラボ、2年の熱海ラボの取組説明と、本年度の取組計画についての協議を行った。



● 5/21（火）教職員校内研修 ～その1～

5月21日の中間試験後に文部科学省指定事業に関わる教職員校内研修を行った。本校の全職員が研修に参加し、「本校生徒に足りないもの」や、「今後育成していきたい能力」について意見を交わし合った。未来を切り開くために必要な資質・能力・本校において育むべき3つの能力は「主体性」・「協調性」・「探究力」だという結論に至り、引き続き「地域に貢献できる人材像」の共有化を図っていく。



● 5/31（金）第2回校内連携推進委員会（CASP会議）

5月31日に第2回校内連携推進委員会（CASP会議）を開催した。第2回は評価開発グループより進捗状況報告をし、委員の静岡文化芸術大学文化政策学科 船戸修一准教授より「人口が減少する中で農山村の集落を残すために」のテーマのもとに講演をいただいた。同じような課題を抱える地域の取組を聞き、教員にとって非常に参考になる話であった。



● 6/12（水）教職員校内研修 ～その2～

6月12日に評価開発グループのメンバーのみ、静岡大学大学院教育学研究科の村山教授をお迎えして、評価に関する会議を行った。探究の時間に関する評価については、多くの悩みを抱えていたため、評価の在り方について大変参考になる話を伺うことができた。



● 6/28（金）第1回コンソーシアム会議兼第3回校内連携推進委員会（CASP会議）

6月28日に第3回校内連携推進委員会（CASP会議）を開催した。第3回はCASPコンソーシアム会議を兼ねて行われ、熱海市役所、熱海市立多賀中学校、熱海市立多賀小学校、他7事業所を招き、これまでの取組である高校生ホテル、1年の熱高ラボ、2年の熱海ラボ、理科の授業で取り組んでいるジオパークの説明と各グループの作業計画について説明した。また、本年度の熱海ラボへのご協力のお願いや、今後の取組計画などの協議も行った。多くの事業者様と共に、建設的な話し合いが行われた。



● 9/27（金）地域貢献事業講演会

9月27日に地域貢献事業講演会を開き、5月末に教員向けに講演を行っていただいた静岡文化芸術大学文化政策学科 船戸修一准教授より全校生徒に向けて「人口が減少しても農山村から集落をさせない地域づくり」のテーマのもとに模擬授業を行っていただいた。船戸准教授の地域魅力に対する熱い思いが語られ、生徒たちも食い入るように話を聞いていた。



以下に、講演を聞いての生徒の声を載せる。

- ・周囲の大人やメディアの意見に流されていることが自分にも多々ある。高校生として地域に貢献したいと思った。
- ・人口減少について本当に問題なのか、別の視点で考えることができ、とてもためになった。
- ・先生に紹介してもらった本を読んでみようと思った。
- ・中山間地域と人口減少、限界集落についてグラフや漫画でとても分かりやすく学ぶことが出来た。
- ・人間にとって、関係性がとても重要なのだと知った。
- ・年配の方が増えている地域でも、しっかりと若い世代が助け合えばいいということが分かった。
- ・私たち高校生にもできることがあるということが分かった。
- ・大学に進み、是非社会学について学んでみたいと思った。人口減少や消滅地域など、問題となっていると思ったが、違った考え方をすることもできるのだなと思った。メディアの情報を全て鵜呑みにするのではなく、しっかりと自分自身で考えたいと思った。
- ・私も熱海市のために何か役に立つことをしたいと思った。
- ・家族との関係もそうですが、子供の行動が重要だと分かり、これからの未来を子供が背負っていくんだと言っている大人の気持ちが少しだけ分かった。
- ・熱海市も少子高齢化が進み、私が社会人になる頃にはほぼ、人がいなくなってしまうのではないかと悲観していた。しかし、今回の講話を聴き、人口が減少しても消滅させないような町づくりというものを初めて考え、少し希望が持てた。
- ・今まで全く気にしたことがない内容だったので、新鮮だった。少し難しい内容もあったが、新しい知識が増え、とてもいい機会だった。
- ・提示された情報が必ずしも全て正しいわけではないということが分かり、惑わされないために気を付けたいと思った。
- ・社会学が楽しく、学んでみたいと思った。

● 11/1（金）第5回校内連携推進委員会（CASP会議）

11月1日に第5回校内連携推進委員会（CASP会議）を開催した。第5回は1年「熱高ラボ」、2年「熱海ラボ」、3年「おもひで劇場」の取組み報告、高校や地域の学習環境に関するアンケート結果、今後の取組などの協議を行った。



● 12/6（金）第6回校内連携推進委員会（CASP会議）

12月6日に第6回校内連携推進委員会（CASP会議）を開催した。第6回はコンソーシアム会議を行い、「人材を育てたい」「学校として何を打ち出していくのか」「具体的にどういことができるのか」などといったフィールドワークを行った。普段なかなかできないような、生徒に対する深い想いを教員間で共有でき、有意義な時間となった。



先進校訪問（岡山県）

担当教員：坂田達哉・土屋善史

取り組みの概要

【目的】

教育的に歴史が深い岡山県であるが、教育県といわれるだけあって先進的な取組も数多く取り入れている。本校の探究活動や地域連携のやり方で参考になるものがあればと思い、先進校へ視察に出向いた。

【訪問先】

12/4（水） 岡山県立瀬戸高等学校

12/5（木） 岡山県立和気閑谷高等学校

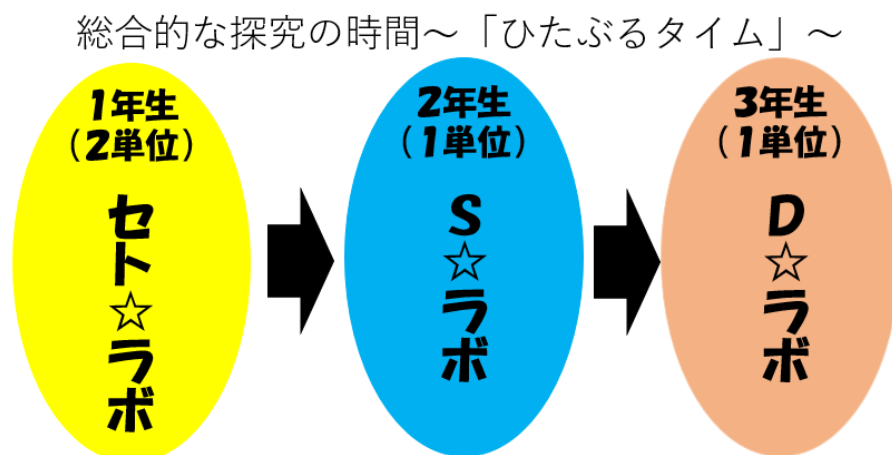
取り組んだこと

1. 岡山県立瀬戸高等学校訪問

岡山県立瀬戸高校は、探究活動に大変力を入れている学校であり、その力を生かして国公立大学 A0 入試を利用した進学実績も挙げている学校である。



下図のように、総合的な探究の時間を「ひたぶるタイム」と名付け、それぞれの学年に応じて〇〇ラボとして取り組んでいる。



セト☆ラボ→中学校別でチームをつくり、地域の課題を知ることが目的

S☆ラボ→SDG s のテーマに沿って、世界を見据えた地域課題の探究を目的

D☆ラボ→1・2年生の探究力を生かし、自分の進路に活かす。学びの設計書の完成

瀬戸高校が最も力を入れて取り組んでいるのは1年生での「セト☆ラボ」である。入学してきた生徒に対し、探究に必要な力を1年で身に付けさせる時間として設定している。

具体的な手順としては、それぞれの中学毎に地域別で分かれ、それぞれの地域の課題を見つける。その後現地に出向き、インタビューなどをして課題の問題点や解決案を探る。そうして得られた情報をしっかりメモを取る。この「メモを取る力」を重視しているようだ。そうしてグループ毎に集めたメモをつなぎ合わせ、発表に移る。この時、それぞれのメモをつなぎ合わせる作業のおかげで、「全員が発表に貢献している」という意識を生徒たちに持たせることができ、帰属意識や自己肯定感が高まる効果が期待できるようだ。

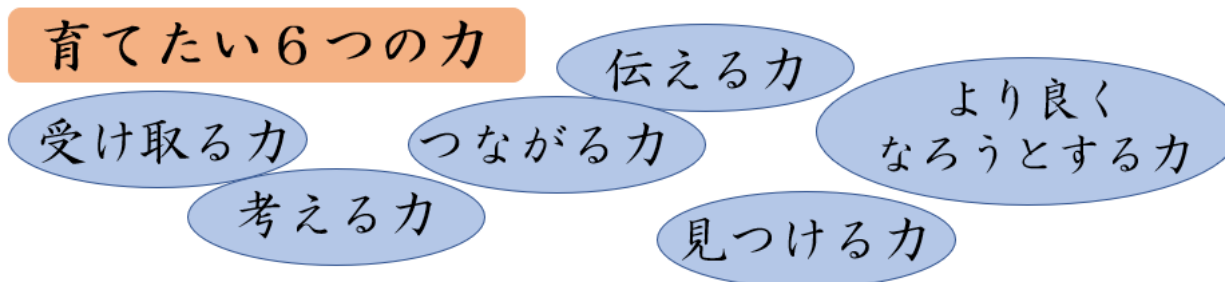


A Oの発表や論文をまとめる力に生かせる！！

こうした瀬戸高校の取り組みは、よりよくなろうとする『イノベーター』育成の目標が見据えてあり、非常に分かりやすいものであった。

また、瀬戸高校の学校経営目標は下図のように6つの力を育てることだと設定しており、従来想像していた学校経営目標と比べ、非常に分かりやすいものであった。中学生に対しては分かりやすい生徒像であり、また、教科にも落とし込みやすいもので参考になった。

～分かりやすい学校経営目標～



☆ 中学生に分かりやすい！

☆ 教科に学校の目標を入れやすい！

2. 岡山県立和気閑谷高等学校

岡山県立和気閑谷高校は 1670 年に岡山藩が開いた日本最初の庶民の学校である「閑谷学校」をルーツに持つ日本最古の学校である。創立 349 年。普通科と探究科があり、本校と同じ「地域協働推進校（地域魅力型）」文部科学省指定校。後述するが ICT や WiFi 環境など先進的な取組を取り入れながら、歴史を尊重して校内のいたるところには「論語」が掲示してあった。このことから、学校のスローガンは『最も古く、最も新しい学びのある学校』



「最も新しい学び」という言葉に象徴されるように、和気閑谷高校では ICT の積極的な活用が見られた。まず、入学時にお金を払うことで 1 人につき 1 台 iPad をレンタルする仕組みであった。その中に数学の AI ソフト「Qubena (キュービナ)」や、英語の「スタディサブリ」をダウンロードして授業で活用していた。学校全体に WiFi も整備されていたため、生徒たちにとって非常に活用しやすい環境であった。

さらに驚くべきことに、和気閑谷高校では夏休み前の三者面談で、1 学期間の取組みについてパワーポイントでまとめ、それを親の前で発表する。他にも、ICT の有効的な活用のために、教員が行う ICT 研修に生徒も出席し、授業に対する意見や助言を生徒が行う場面を設けているようだ。

～ ICT の積極的な活用～



和気閑谷高校の探究の時間は、瀬戸高校と同じように、下図のような「閑谷學」という名前をつけて実施している。生徒が探究した内容は、その町の町長なども話を聞き、お褒めの言葉から厳しい言葉まで、素直な意見をぶつけている。また、従来はポスターセッションであった発表の形式も、ICTの活用に合わせキーノートに変更した。

～課題解決型探究学習「閑谷學」～

1年
(1単位)
「地元の探究」

2年
(2単位)
「テーマ別探究」

3年
(1単位)
「個人の卒論」

地域の人と深くかかわるために、和気閑谷高校では「地域おこし協力隊」の方々と関わっていた。出入りがしやすいように、職員室に専用の机やパソコンを設けている。そうして生徒の探究活動に混ざって活動していた。こうした関わりを含め、和気閑谷高校の目標は「恕」の精神をもった生徒の育成だということが表れていた。



今後本校が取り入れたいこと

1. 育てたい生徒像を分かりやすく

どちらの学校も、その学校でどのような生徒を育てたいのかという生徒像がはっきり分かりやすく伝わってきた。中学生にとっても、在校生にとっても、教員にとっても生徒像がはっきりしていることは有益であると感じた。

2. 先進的な取組の導入

探究活動の中に、先進的な取組は欠かすことができないものだと感じた。探究は、他の真似をしてできるものではないし、自分たち自身で新しいものを作り出そうという精神の育成が今後必要になると実感した。

3. 行動力を身に付ける

人脈や情報を得るために、「とりあえずやってみよう」「とりあえず動こう」という気持ちで2校から強く伝わってきた。この行動力は参考になるものであり、見習っていききたいものである。そのためにも、教員の連携や教員の行動力を身に付けていきたい。

先進校訪問（宮城県気仙沼市）

担当教員：渡邊太一・野田正人

取り組みの概要

【目的】

先進的なESDが行われている気仙沼市内の学校を視察し、地域連携に係る取り組みについて御教示いただくことで、地域リソースの活用や人材発掘の方法、探究活動の評価、教科横断、学校縦断・地域横断的なカリキュラム開発などのヒントを伺うため。

※ESD…環境・貧困・人権・平和・開発等の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動。

【訪問先】

12/1（日）東日本大震災遺構「伝承館」（旧気仙沼向洋高校）

12/2（月）気仙沼市立鹿折小学校、気仙沼市教育委員会、宮城県気仙沼高等学校

12/3（火）気仙沼市立階上中学校

取り組んだこと

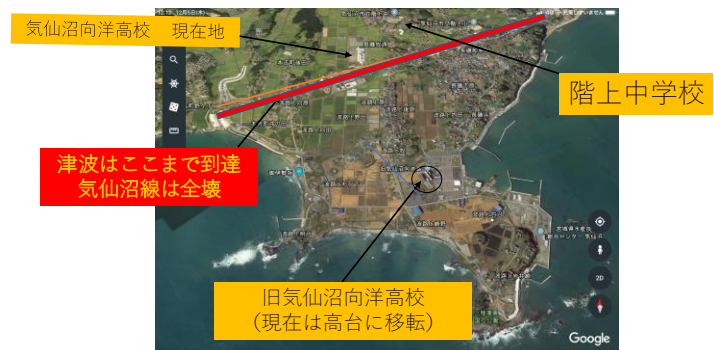
1. 旧気仙沼向洋高校東日本大震災遺構「伝承館」訪問

宮城県気仙沼向洋高校は海から数百mの沿岸部である階上地区に立地した効率の水産高校。缶詰など水産加工品生産実習施設や遠洋航海が可能な実習船も持つ。被災後は震災遺構として整備し、見学可能な施設として保存されている。



東日本大震災当日は、部活動を行っていた。地震発生直後、生徒たちは高台の階上（はしがみ）中学校まで走って避難させ、教員は学校に待機。理由は直前に学検があったため、学検資料を水にぬらさないために上層階へ文書の移動をさせていた。

向洋高校自体は、すでに新校舎が、津波が到達した部分よりさらに奥に新校舎を建て直されていた。

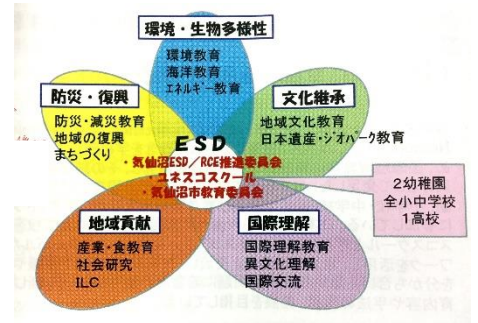


2. 気仙沼市教育委員会訪問

斎藤博厚学校教育課長が対応していただいた。

気仙沼市の教育大綱は「FISH」(F (Forsight)「先を見渡す力」、I (Insight)「本質を見抜く力」、S (Strategy)「道を切り開く力」、H (Harmony)「つなぐ力」とまとめられている。また、市内のすべての小学校 14 校、中学校 11 校がユネスコスクールとして認定されている。幼稚園は 2 園、高校は 1 校が認定されている。

気仙沼市のESDは右の5つのフィールドの中から各学校が選択して取り組むこととなっている。「ESDをやりなさい!」という枠組みはあるものの、実際は多様な取り組みを開発する余地がかなり残されている。



気仙沼市のESDは、始まった2002年頃は国際交流活動が主であった。それが、東日本大震災が起きたことから、環境教育との結びつきを強めようという動きが強くなった。唐桑半島での「森は海の恋人」運動(1989年～)、松岩小学校「教科横断的な環境教育」(1996年～)など、元から行われていた環境に関する多様な実践により支えられ、発展していった。

3. 気仙沼市立鹿折小学校訪問

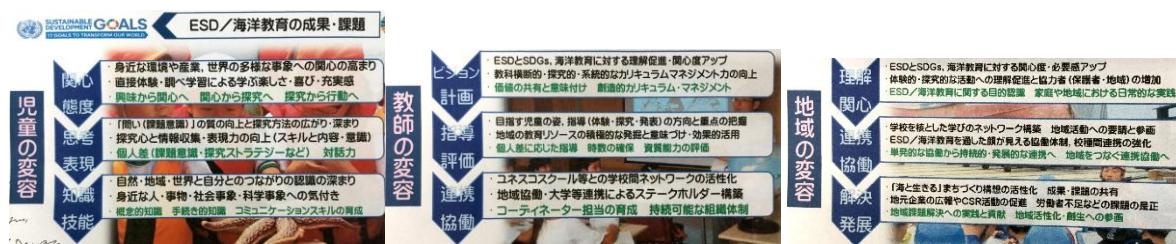
浅野亮校長に対応して頂いた。地域、全国との繋がりを築き、気仙沼市のESDを作ってきた方である。生徒数199人6クラス、常勤教員21人と、将来の熱海高校と同規模の学校であった。学校教育目標及び学校経営目標にESDを位置づけ、ESDを基軸に学校運営・環境整備を行っていた。園・小・中・高との交流があり、総合的な学習の時間だけでなく、学校全体でESDを行っていた。



児童は、多様な取り組みを通して様々な方と関わる中で刺激を受けていた。その結果、実り多い探究活動を行うことができ、優れた成果物を発表していた。その結果、全国から発表の依頼が児童の元に来るようになっていた。



取り組みの成果としては、児童が成長することは勿論、教員や地域も変わっていった、というお話が印象的であった。



4. 宮城県気仙沼高等学校訪問訪問

千葉教頭が対応に対応して頂いた。生徒数 758 人 19 クラス、常勤教員 50 人である。昨年度卒業生の進路は右のように、非常に多様である。

2年生からは「人文」「理数」「創造」の3類型に分かれる。職員の平均年齢は 34 歳くらい。希望して異動してくる人は少ないが、その分、学校の方針にフィットしやすいということであった。

平成 20 年度にユネスコスクールに認定後、平成 28 年度より 5 年間 SGH(スーパーグローバルハイスクール)に指定されたり、第 9 回 ESD 大賞において「文部科学大臣賞」を受賞したりと、数々の賞を受賞している。

学校設定科目は、「地域社会研究」が 1 年生全員必修で 1 単位、地域課題の解決策を研究している。テーマは、「海と産業」「海と防災」「海と人間」「海の文化」「三陸の自然」の 5 つから選択することとなる。2 年、3 年時にも課題研究 I・II、学問領域研究で発展していく。

1 年次「地域社会研究」は、年間を通して右のような流れで行われている。知識技術を学び、フィールドワークをし、発表すると、サイクルがはっきりしていた。また、県内の多くの企業、機関によって取り組みが支えられていた。

	人数	割合
国公立 4 大	36	12%
私立 4 大	88	30%
短大・大学校	32	11%
看護医療系	26	9%
専門学校	80	27%
公務員	11	4%
民間就職	23	8%
合計	296	100%

5月 地域理解講座 7月 課題研究講演会 (9月にも実施)



フィールドワークの実施

10月 気仙沼市内 12月 県内各大学



11月 中間発表会 1月 最終発表会



5. 気仙沼市立階上中学校訪問

菅原校長が対応して下さいました。

防災学習は平成 17 年度から始まり、今年で 13 年目。スローガン「未来の防災戦士」のもと実施しており、平成 23~27 年頃には ESD 大賞を受賞し、国際防災世界会議等に参加する等、高い評価を得ていた。

菅原校長は、赴任する前から防災に力を入れているとは聞いていたが、実際に何をしているのかは知らない状態であった。そんな中4月に、防災主任から「防災、つらいっす」と弱音を聞く。周りからの高い評価とプレッシャーに対し、何すればいいのかわかっていた。

そんな声を受け、防災学習計画の見直しを実施した。

まず、東北大学佐藤準教授に協力依頼をし、アドバイス貰った。最初に「お金ないです」と言った結果、1回1万5千円で来てもらえることになった。教授と学校で、防災に関するニーズは一致していた。

さらに、地域住民への手作りアンケートを実施した。最初は回答が3割だったが、繰り返すうちに、4～5割にアップしていった。また、「防災への意識低下」「事前に避難場所を決めていた人ほど避難開始が早い」など、大切な結論にもたどり着いた。

子供が動くことで、地域も防災に対して手を貸してくれるようになっていった。防災訓練の際は、手書きの便りを地域に向けて出すことで参加率はアップした。

様々なイベントは「手上げ」方式で、毎回希望者がたくさん出る。安倍首相が伝承館に来たときも、案内の依頼が来た。日ごろからも、多くの生徒が伝承館で実際に案内をしている。

防災主任が校長に「防災、ツライっす」と言ったことが、より充実した防災教育が行われるきっかけになったのが興味深い。弱音を吐き、それを共有するのは大切だと実感した。また、地域人材やコーディネーターの力を借りることで、鹿折小学校以上に「持続可能なESD」になっていると実感した。



今後本校が取り入れたいこと

1. 熱海市の小中学校と連携

近隣の小・中学校が、総合的な学習の時間で今まで何をしてくれているか、知らない状態である。まずは、互いの教育課程を読み込むところから始める。その上で、出身生徒が多い小中学校と合同研修会をして、情報交換をしていきたい。

2. 地域人材の確認

生徒の手を借りれば、地域人材をもっと発掘できるはずなので聞いてみる。教員も、生徒に対してアンケートを取ったり、直接地域の方から話を聞いたりすることで、無理のない範囲で発掘していきたい。

3. 自治会長とより強くつながる。

地域の力を借りるには、自治会長と強く繋がるのが不可欠である。管理職や熱海市在住の方に協力していただいたり、地域のイベントへ参加したりすることで、繋がりを強くしていきたい。

新聞記事 一覧



こんなに紹介されたい☆

平成31年（2019年）4月10日（水曜日） 日刊



地域協働による 高校教育改革推進

熱海高文科省指定校に 県内公立 地域貢献できる人材育成

熱海高、石田校長は、生徒の心は、文部科学省本庁に届く。地域の協働による高校教育改革推進事業の指定校に選ばれた。県教委、熱海市、市教委、小中、地産地消推進センター、共同事業を推進し、地域の課題と向き合い、地域のために貢献できる人材の育成を目指す。

熱海高は、少人数指導、個性・才能を伸ばすことを目指し、地域に貢献できる人材の育成を推進している。県教委、熱海市、市教委の協賛のもと、地域協働による高校教育改革推進事業の指定校に選ばれた。県教委、熱海市、市教委の協賛のもと、地域協働による高校教育改革推進事業の指定校に選ばれた。

熱海高、法人会青年部会と連携
販売実習や模擬納税体験

「起業家育成PJ」を開始

熱海高の生徒は、起業家育成プロジェクトの一環として、法人会青年部会と連携し、販売実習や模擬納税体験を行った。生徒たちは、実際のビジネス環境を体験し、起業家精神を養った。

熱海ラボスタート

エピソードの山崎さんら3人
事業所の課題解決法紹介

熱海ラボは、地域の課題を解決するためのプラットフォームとしてスタートした。エピソードの山崎さんら3人が、事業所の課題解決法を紹介し、参加者と共有した。

地域支える人材目指せ

熱海ラボは、地域の課題を解決するためのプラットフォームとしてスタートした。エピソードの山崎さんら3人が、事業所の課題解決法を紹介し、参加者と共有した。

熱海ラボは、地域の課題を解決するためのプラットフォームとしてスタートした。エピソードの山崎さんら3人が、事業所の課題解決法を紹介し、参加者と共有した。

令和元年（2019年）6月4日（火曜日） 日刊

熱海新聞の最新記事や地域情報をお届けします。

平成31年（2019年）4月19日（金曜日）

熱海新聞の最新記事や地域情報をお届けします。

2020年（令和2年）1月15日（水曜日）

熱海新聞の最新記事や地域情報をお届けします。

熱海高生、添乗も 観光業知識を習得

バスツアー添乗員として、観光業の知識を習得した熱海高生が、地域貢献活動の一環として活躍している。

地元企業人の話聞く

放課後にキヤリアカデー 6月まで6回懇談

熱海高

熱海高のキヤリアカデーは、放課後にキヤリアカデーとして実施されている。今年度は、6月まで6回、地元企業人と懇談する機会を設けた。この活動を通じて、生徒たちは、地元企業人の仕事内容や、求められるスキルなどについて、詳しく話を聞いた。また、将来の進路について、具体的なアドバイスをもらった。この活動は、生徒たちの進路意識を高め、地元企業への理解を深めることに貢献している。



地元企業人と懇談する生徒たち。右から、熱海高のキヤリアカデーに出席する生徒たち。

令和元年（2019年）5月25日（土曜日）

熱海新聞

令和元年（2019年）12月15日

熱海高生 地元産レモンPR

ラスカで 収穫した150個販売

熱海産レモンのブランド化プロジェクトに取り組み、熱海高の生徒たちが、ラスカで収穫した150個のレモンを販売した。この活動を通じて、地元産レモンのPRを行い、消費者への認知度を高めることに貢献している。



熱海産レモンなどを販売する熱海高生徒たち。＝熱海市のラスカ農市場

市内初の産地が熱海を地域住民に知らせるための活動として、熱海産レモンをPRする。この活動を通じて、地元産レモンの認知度を高め、消費者への理解を深めることに貢献している。

熱海新聞

熱海新聞

熱海高3年生 津波避難クイズで解説 集大成 体験ツアーに20人



熱海高3年生が、防災学習の集大成として、津波避難クイズで解説した。この活動を通じて、防災意識を高め、地域住民への啓発活動にも取り組んでいる。また、体験ツアーに参加した20人は、実際に避難経路を確認し、防災意識を高めることに貢献している。

熱海高3年生が防災クイズに取り組んでいる様子。

令和2年（2020年）1月22日（水曜日） 日刊

令和元年度 静岡県立熱海高等学校 研究開発報告会

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」

日時 2020年2月25日（火）13:30～16:45

場所 熱海高等学校会議室

【報告書 執筆スタッフ】

熱海高等学校教員等

【編集スタッフ】

奥山ゆう子 ・ 坂田達哉

2020年2月25日発行
